2022 ズバリ！的中

古文

京都大学

本文も設問ほとんどすべて的中。

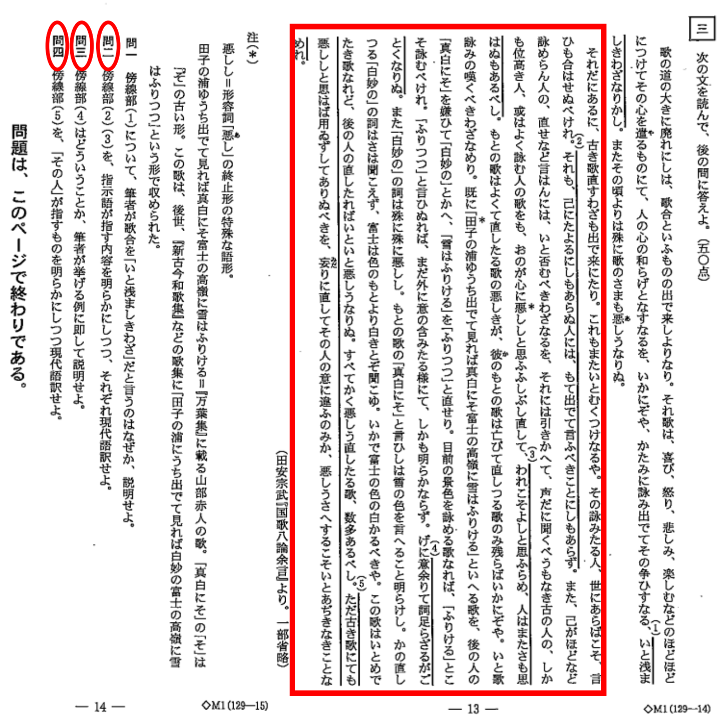
特に現代語訳では、設問条件までも的中。

入試問題

前期日程
古文　三　問2、問3、問4

河合塾

第2回　京大入試オープン
9～10頁　三



三　次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

歌の道の大きに廃れにしは、歌合といふものの出で来しよりなり。それ歌は、喜び、怒り、悲しみ、楽しむなどのほどほどにつけてその心を遣るものにて、人の心の和らげとなすなるを、いかにぞや、かたみに詠み出でてその争ひすなる、(1)いと浅ましきわざなりかし。またその頃よりは殊に歌のさまも悪しうなりぬ。

それだにあるに、古き歌直すわざも出で来にたり。これもまたいとむくつけなるや。その詠みたる人、世にあらばこそ、言ひも合はせぬべけれ。(2)それも、己にたよるにしもあらぬ人には、もて出でて言ふべきことにしもあらず。また、己がほどなど詠めらん人の、直せなど言はんには、いと否むべきわざなるを、それには引きかへて、声だに聞くべうもなき古の人の、しかも位高き人、或はよく詠む人の歌をも、おのが心に悪しし*と思ふふし直して、(3)われこそよしと思ふらめ、人はまたさも思はぬもあるべし。もとの歌はよくて直したる歌の悪しきが、彼のもとの歌は亡びて直しつる歌のみ残らばいかにぞや。いと歌詠みの嘆くべきわざなめり。既に「田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」*といへる歌を、後の人の「真白にぞ」を嫌ひて「白妙の」とかへ、「雪はふりける」を「ふりつつ」と直せり。目前の景色を詠める歌なれば、「ふりける」とこそ詠むべけれ。「ふりつつ」と言ひぬれば、まだ外に意の含みたる様にて、しかも明らかならず。(4)げに意余りて詞足らざるがごとくなりぬ。また「白妙の」の詞は殊に殊に悪しし。もとの歌の「真白にぞ」と言ひしは雪の色を言へること明らけし。かの直しつる「白妙の」の詞はさは聞こえず、富士は色のもとより白きとぞ聞こゆ。いかで富士の色の白かるべきや。この歌はいとめでたき歌なれど、後の人の直したればいと悪しうなりぬ。すべてかく悪しう直したる歌、数多あるべし。(5)ただ古き歌にても悪しと思はば用ゐずしてありぬべきを、妄りに直してその人の意に違ふのみか、悪しうさへするこそいとあぢきなきことなめれ。

（田安宗武『国歌八論余言』より。一部省略）

注（*）

悪しし＝形容詞「悪し」の終止形の特殊な語形。

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける＝『万葉集』に載る山部赤人の歌。「真白にぞ」の「ぞ」は「そ」の古い形。この歌は、後世、『新古今和歌集』などの歌集に「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」という形で収められた。

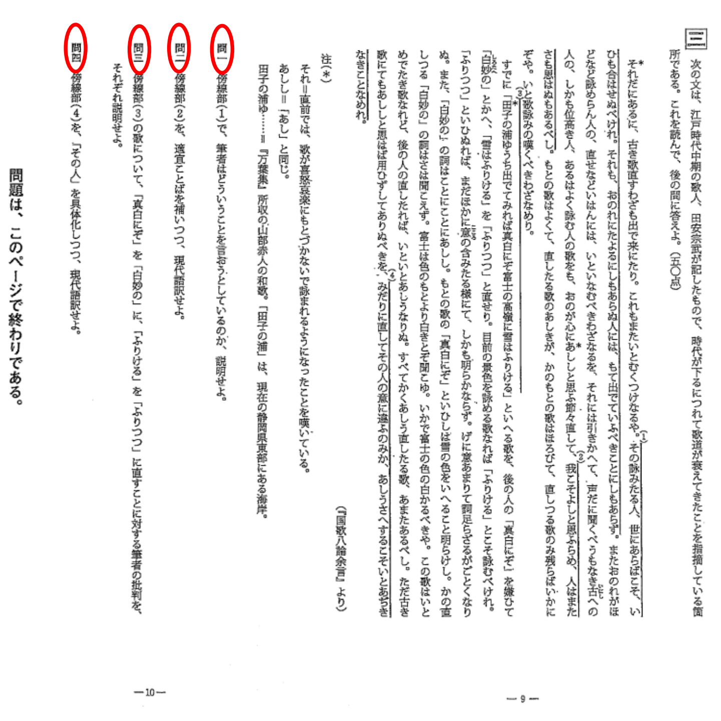
問一　傍線部(1)について、筆者が歌合を「いと浅ましきわざ」だと言うのはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部(2)(3)を、指示語が指す内容を明らかにしつつ、それぞれ現代語訳せよ。

問三　傍線部(4)はどういうことか、筆者が挙げる例に即して説明せよ。

問四　傍線部(5)を、「その人」が指すものを明らかにしつつ現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。



三　次の文は、江戸時代中期の歌人、田安宗武が記したもので、時代が下るにつれて歌道が衰えてきたことを指摘している箇所である。これを読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

それ*だにあるに、古き歌直すわざも出で来にたり。これもまたいとむくつけなるや。(1)その詠みたる人、世にあらばこそ、いひも合はせぬべけれ。それも、おのれにたよるにしもあらぬ人には、もて出でていふべきことにしもあらず。またおのれがほどなど詠めらん人の、直せなどいはんには、いといなむべきわざなるを、それには引きかへて、声だに聞くべうもなき古への人の、しかも位高き人、あるはよく詠む人の歌をも、おのが心にあしし*と思ふ節々直して、(2)我こそよしと思ふらめ、人はまたさも思はぬもあるべし。もとの歌はよくて、直したる歌のあしきが、かのもとの歌はほろびて、直しつる歌のみ残らばいかにぞや。いと歌詠みの嘆くべきわざなめり。

すでに(3)「田子の浦ゆうち出でてみれば真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」*といへる歌を、後の人の「真白にぞ」を嫌ひて「白妙の」とかへ、「雪はふりける」を「ふりつつ」と直せり。目前の景色を詠める歌なれば「ふりける」とこそ詠むべけれ。「ふりつつ」といひぬれば、まだほかに意の含みたる様にて、しかも明らかならず。げに意あまりて詞足らざるがごとくなりぬ。また、「白妙の」の詞はことにことにあしし。もとの歌の「真白にぞ」といひしは雪の色をいへること明らけし。かの直しつる「白妙の」の詞はさは聞こえず。富士は色のもとより白きとぞ聞こゆ。いかで富士の色の白かるべきや。この歌はいとめでたき歌なれど、後の人の直したれば、いといとあしうなりぬ。すべてかくあしう直したる歌、あまたあるべし。ただ古き歌にてもあししと思はば用ひずしてありぬべきを、(4)みだりに直してその人の意に違ふのみか、あしうさへするこそいとあぢきなきことなめれ。

（『国歌八論余言』より）

注（*）

それ＝直前では、歌が喜怒哀楽にもとづかないで詠まれるようになったことを嘆いている。

あしし＝「あし」と同じ。

田子の浦ゆ……＝『万葉集』所収の山部赤人の和歌。「田子の浦」は、現在の静岡県東部にある海岸。

問一　傍線部(1)で、筆者はどういうことを言おうとしているのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

問三　傍線部(3)の歌について、「真白にぞ」を「白妙の」に、「ふりける」を「ふりつつ」に直すことに対する筆者の批判を、それぞれ説明せよ。

問四　傍線部(4)を、「その人」を具体化しつつ、現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。